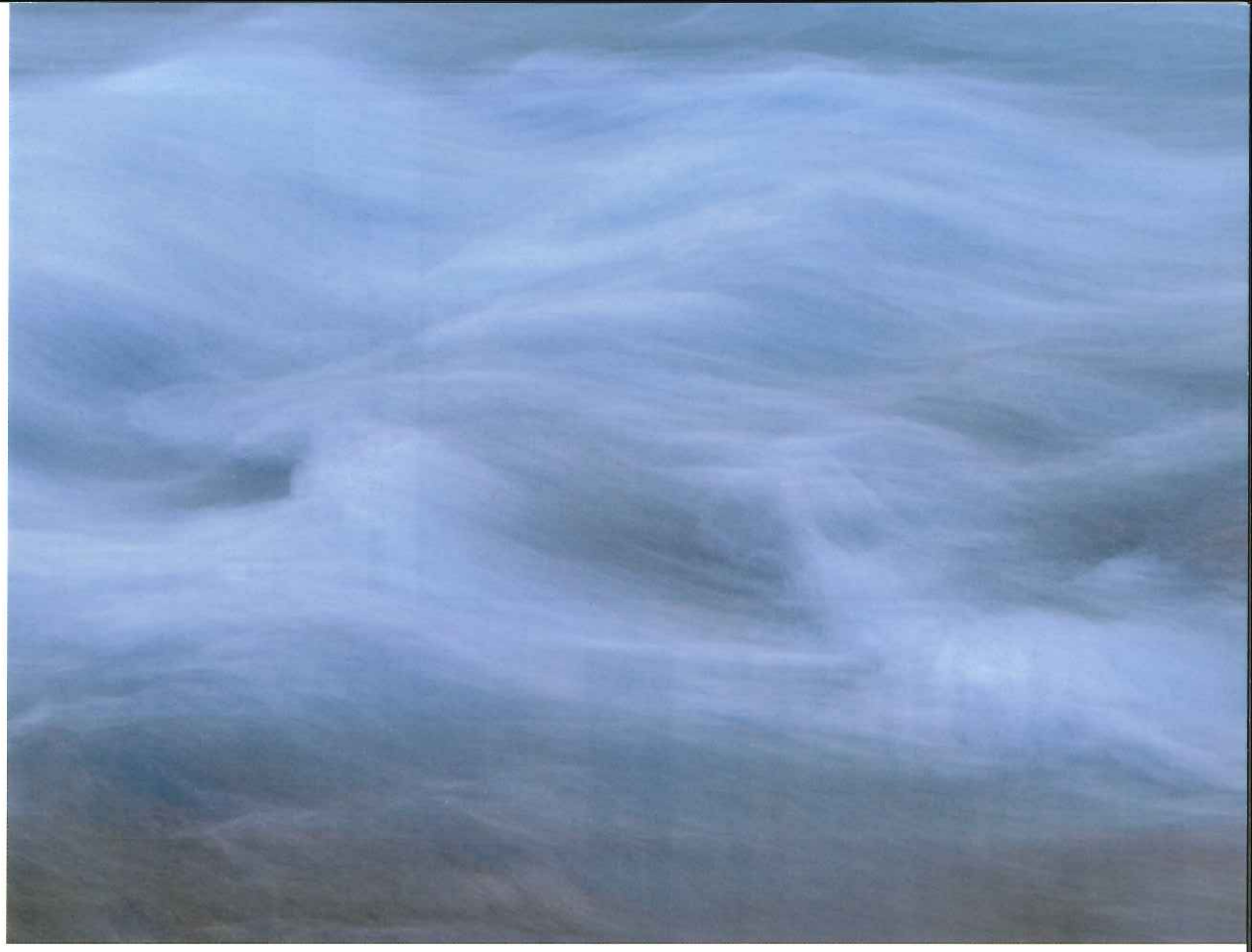
高知県立文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
Vol. 62



▲大岡信さんのふるさとを流れる静岡県・柿田川（撮影：岩本圭司）

リレー随筆

大岡信と紀貫之

岩本 圭司

詩人であり批評家である大岡信の、優れた評論のひとつに『紀貫之』（日本詩人選7　筑摩書房・一九七一年）がある。そのなかで大岡は、明治31年に正岡子規が「下手な歌よみ」と断じることによって、いわば囚われの身となったままであった貫之を見事に解放することに成功している。

万葉集を宗として「有りの儘」、「自然」を尊んだ若き革新家子規は、「理屈」めいた、「手弱女（たおやめ）ぶり」とみえる紀貫之、あるいは古今集を、大海に浮かぶ小舟の上に縛り付け流し去ろうとしたのだが、大岡は「ディレクトネス（直接性）、ストレートネス（虚飾なき単純率直さ）を渇望した明治の浪漫的自然主義の、最も早いあらわれのひとつが、子規の革新にほかならなかったのだと、今は言うことができる。ということは、逆の見方をすれば、子規の歯切れのいい、説得力に富んだ論も、その時代的刻印からついに逃れ得るものではないということでもあろう。」と述べ、貫之と子規を同じ大海の大きなうねりに上下するふたつの小舟としてみせた。その上で大岡は貫之の魅力について「日本語の柔軟な可塑性を、形容詞、副詞、助動詞、助詞の細心な彫琢（ちょうたく）と駆使によって、いちじるしく増した功績の多くは、古今集に帰せられる。貫之はその方面での傑出した才能であった。」また「土佐日記という、隅におけない観察眼と諧謔と自己批判をもち、歌に関する卓抜な批評家の眼が光っている虚構的日記文学の創始者である。」と語っている。

と、これは『紀貫之』のほんの概略というべきものだろうが、この論全体を通して私の心に一番強く残るのは、大岡は貫之の歌のなかにどこか「水」を見ているように思えることだ。それは水を題材とした歌のなかにというよりも、「我」という存在はじめ、名詞や動詞をテニヲハの奥に潜め、抽象的・時間的揺らぎを際立たせる貫之の文体のなかにその美を見いだしているからである。水は自ら色を持たず、姿を持たず、瞬時に自らを受け入れるものの形となり、光を曲げ、反射する。水は他者を借りて自分の存在を明らかにしながらまた重層的に相手の存在を語る。水の都三島に生まれ、水と共に少年期を過ごした大岡にとって、貫之の歌はまさに愛すべき水なのではないかと私には見える。

最後に大岡の土佐日記に触れたこの一節を寄せたい。「この日記の記述が、一日一日の長短のリズムといい、数多い歌の配置やそれへの鑑賞的・批評的・作歌指導的論評といい、また風景の描写、往時への回想といい、（中略）エロティシズムや風刺、皮肉、諧謔の味付けといい、（中略）それぞれにところを得て興味を巧みにつなぎとめるように書かれてあることに気付くのである。」

（大岡信ことば館館長・造形家）

展覧会紹介 Exhibition

紀貫之と『土佐日記』展への誘い

平成25年
9月28日(土)
▼
11月24日(日)
企画展示室
観覧料400円

「をとこもすなる日記といふものをおむなもしてみむとてするなり」という冒頭の一句で知られる我が国最初の日記文学、紀貫之の『土佐日記』は、貫之が土佐の守の任を終えて、京に帰る55日間の旅を女性に仮託し綴った紀行文としても知られ、土佐で亡くした愛児への思慕と、都への望郷の思いが歌とともに伝わってきます。

◀鹿持雅澄著『土佐日記地理辯』古地図

展覧会では、歌人として名を馳せた紀貫之の人と文学、特に後の日記文学に大きな影響を与えた『土佐日記』を中心に紹介します。

文学史の中、人々は『土佐日記』をどのように捉えてきたのでしょうか。定家本以降の書写本をはじめ、江戸時代以降の当館所蔵の資料を中心に見ていきたいと思います。

また、今回は、大岡信ことば館館長の岩本圭司氏の協力のもと、展示空間を五感を通して楽しんでいただく演出もいたします。是非、紀貫之の世界をお楽しみください。本格的な古典の展覧会は、高知県立文学館が平成9年に開館してから、初めての開催となります。

展覧会の構成

第一部　土佐の風土と文学
（常設展示室古典コーナー又は2階ロビー）

1200年前の土佐の国は、海の国、山の国という二元的な自然環境の影響を受ける一方、孤独、南荒僻遠の地であったことから、遠流の国、修行の国としての二元的な歴史環境の影響も受けています。

その二元的な精神風土の中から、土佐の文学は誕生しました。

ここでは、土佐の自然と歴史的背景の中誕生した、土佐文学の魅力を紹介します。

第二部　紀貫之 人と文学
（企画展示室及び2階ロビー）

紀貫之という人物や土佐の国司としての貫之と彼が残した文学、特に『土佐日記』『古今和歌集』などを通して、作品の魅力をお伝えします。

また、『土佐日記』の代表的な書写本の数々を紹介します。

一、紀貫之～人

紀貫之（未詳～945）は、土佐の国司を務めた平安時代前期の歌人であり、三十六歌仙の一人としても知られる人物です。若い時から和歌に秀れ、寛平5（893）年9月には「是貞親王家歌合」「寛平御時后宮歌合」に列しました。延喜5（905）年には、醍醐天皇の命により、初の勅撰和歌集である『古今和歌集』を紀友則・壬生忠岑・凡河内躬恒らと共に編纂し、仮名による序文である仮名序を執筆しました。勅撰歌人として『古今和歌集』（101首）他、勅撰和歌集に435首の和歌を入集しており、作品集には、自選集『貫之集』や、散文として『土佐日記』などがあります。

『土佐日記』は、日本の日記文学の中で、完本として伝存する最古のものであり、その後の仮名日記文学や随筆や女流文学の発展に大きな影響を与えました。

二、紀貫之～文学

私たちは、『土佐日記』が紀貫之の作であるという事を知っていますが、残念ながらその原本は残されていません。一番古いとされる書写本は、文暦2年（1235）年に京都の蓮華王院（今の三十三間堂）に宝蔵されていた『土佐日記』を藤原定家が閲覧し書写したものであり、外題には、「土左日記貫之筆」と記されています。この書写本は、現在、前田育徳会尊敬閣文庫が所蔵し、国宝に指定されています。

以後、青谿書屋旧蔵本、日本大学図書館蔵本、宮内庁書陵部蔵本、近衛家蔵本、三条西家旧蔵本等などが残されています。今回レプリカではありますが、貴重な資料の数々を展示し、その特色を紹介します。

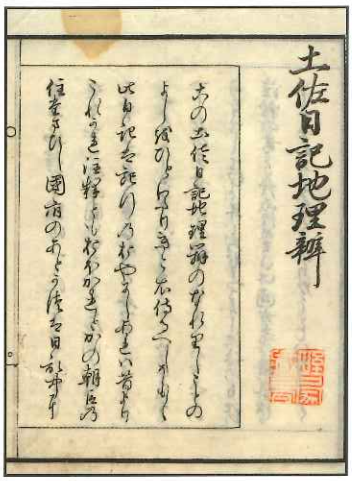
また、土佐では、江戸時代以降、桂井素庵、安養寺禾麿、尾池春水、鹿持雅澄といった高知ゆかりの人々が『土佐日記』の研究を手がけてきました。

▲紀貫之像　佐竹本三十六歌仙切　耕三寺博物館蔵 レプリカ

会覧展紹介 Exhibition

紀貫之と『土佐日記』展への誘い

平成25年
9月28日(土)
▼
11月24日(日)
企画展示室
観覧料400円



▶鹿持雅澄著『土佐日記地理辯』

彼らは、産土にこだわりをもち、土佐の地理に着目し、研究に取り組み、そして、研究書を残しました。近世から現代へ、『土佐日記』の研究はどのようになされてきたか、田中瀧治氏寄贈の当館所蔵資料をもとに見てみたいと思います。

また、『土佐日記』には、数多くの人々が登場し、それぞれが和歌を詠んでいます。「多様性と和歌」について、また、当時の「気候」や「食」などについても紹介します。

◀月字額　黒潮町の廃寺松山寺に伝えられた土佐唯一の伝紀貫之筆「月字」

三、『土佐日記』を旅する ～街道と海道（往路と復路）～

今日では、陸路でも4時間程で、高知～京都間を旅することができますが、当時は、55日間という長旅をしなくてはなりませんでした。その苦労は、並大抵ではありません。ここでは、来館者のみなさまとともに『土佐日記』の旅程を辿ってみたいと思います。

土佐国衙跡～貫之屋敷跡～土佐国分寺～五台山からの浦戸湾～舟入川～鹿児神社～羽根岬～津呂港に建てられた貫之の記念碑～室戸岬～土佐日記御崎の泊の碑～阿波の鳴門～天王山より淀川を望む～住吉大社～男山八幡宮～桂川の夕波～比叡山の裳立山にある紀貫之の墓～仙洞御所にある紀氏遺跡碑など、土佐への往路と復路を辿ります。

■主な展示資料

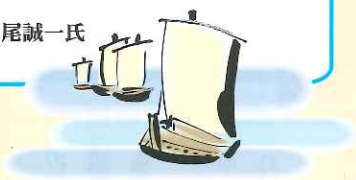
- 「土佐日記」佐多芳郎筆
- 『土佐日記地理辯』鹿持雅澄著　個人蔵
- 定家自筆本（1235年）国宝　前田育徳会蔵（レプリカ）
- 為家自筆本（1236年）国宝　青谿書屋本　東海大学図書館蔵（レプリカ）
- 宗綱自筆本（1490年）　日本大学図書館蔵（レプリカ）
- 江戸時代以降の『土佐日記』転写本及び研究書
- 「土佐国海道図」高知県立図書館蔵
- 天神縁起　模本　前田育徳会蔵（レプリカ）
- 「高野切」国宝　山内家宝物資料館蔵（レプリカ）
- 「古今和歌集」伝　阿仏尼　筆

（学芸課長／津田加須子）

◆関連企画のご案内◆

■公開講座「土佐の魅力再発見」

- 日　時：9月29日（日）午前9時～
- 場　所：高知県立文学館　1階ホール
- 参加費：要当日観覧券
- 定　員：100名（事前申込・電話又は文学館受付）
- 内　容：1，「南学について」　南国史談会会長　藤本眞事氏
  2，「絵金の世界」　絵金蔵蔵長　横田 恵 氏
  ☆土佐琵琶の演奏　谷川桃水氏
  3，「土佐日記の魅力について」　南国史談会会長　藤本眞事氏
  4，「歌人　紀貫之」東京外国語大学総合国際学術研究院教授　村尾誠一氏
  ☆紀貫之と『土佐日記』展観覧　展示解説（企画展担当者）



■文学散歩「土佐日記の旅程を辿る」

- 開催日：10月1日(火)、13日(日)、11月7日(木)
- 内　容：紀貫之国府跡など土佐日記ゆかりの地を公共交通機関でまわります。
- 定　員：30名（電話又は文学館受付にてお申し込みください。）
- 参加費：3,000円程度

■雅楽の演奏とカルチャーサポーターによる『土佐日記』の朗詠

- 日　時：10月2日(水)　午後2時～
- 場　所：高知県立文学館　1階ホール
- 内　容：雅楽の演奏とカルチャーサポーターによる『土佐日記』の朗詠
- 定　員：60名（電話又は文学館受付にてお申し込みください。）
- 参加費：要当日観覧券

■「苔玉」をつくろう

- 日　時：10月14日(月・祝)　午後2時～4時
- 場　所：高知県立文学館前 特設会場
- 内　容：紀貫之ゆかりの国分寺（別名：土佐の苔寺）にちなみ、苔玉を作ります。
- 参加費：材料費（800円程度）＋要当日観覧券
- 定　員：20名（事前申込・電話又は文学館受付）

他にも展示解説、朗読、クイズイベント、コンサートなど盛りだくさんの関連企画でお待ちしています。

☆「いにしえ」の世界へ旅しよう
～紀貫之と紫式部が文学館へやってくる～

11月9日(土)
①午前11時
②午後2時

紀貫之と紫式部が文学館へやってきます。二人と一緒に写真を撮りませんか。

参加費：要当日観覧券

協力：紀貫之まつり実行委員会

有川浩のセカイとコトバ展

好評のうちに閉幕しました！展覧会のレポートをお届けします！

高知初 恋する文学展

▲展示風景

高知県立文学館では、4月20日(土)から約3ヶ月間にわたり、高知県出身の作家・有川浩さんの、『県庁おもてなし課』『図書館戦争』の映画化、『空飛ぶ広報室』のテレビドラマ化を記念して、有川作品のセカイとコトバの魅力を企画展にて紹介しました。

今回の展覧会では、有川さんから文学館に寄贈いただいたトロフィーなどの資料も含め、作品に関して一堂にご覧いただける機会になりました。そのほかにも、ブルーインパルスの模型や挿絵原画なども展示し、有川さんの作品をより深く理解できるように努めました。

また、高知県庁おもてなし課や東宝株式会社ともタイアップし、映画のスチール写真やロケ地マップのご紹介、県庁に設置された映画ロケセットと連動したスタンプラリーなども行いました。

会期途中には展示の入れ替えや劇団関係のコーナーを追加。有川さんの作品を上演したキャラメルボックスや、『シアター！』のモデルとなったTheatre（シアトル）劇団子に協力いただき、ポスターやチラシ・上演時の台本などを展示し、有川作品の展開の幅広さを感じていただけたと思います。

1階のミュージアムショップでは、有川さんの著作本やイラストを手がけた方の関連グッズのほか、馬路村農協と連携して地場産品も販売しました。有川さんの作品には、馬路村やゆず製品の描写が多く見られることにちなみ設けたコーナーでしたが、好評をいただきました。

関連企画としては、『県庁おもてなし課』新聞連載時の挿絵を描かれた大矢正和氏を講師に迎えてのワークショップ、当館館長によるトーク、「木洩れ日コンサート」、『県庁おもてなし課』『植物図鑑』と絡めた2パターンの文学散歩なども催しました。「木洩れ日コンサート」では、NPO法人 こうち音の文化振興会の皆さんの演奏で、〝愛〟をテーマにしたクラシック曲や、イベントオリジナルの曲を藤並の森をバックにお楽しみいただきました。

▲木洩れ日コンサートの様子

来館された方からは、観覧をきっかけに有川さんの作品をもっと読んでみたくなったとの声をいただき、多くの方々に有川さんの作品世界を楽しんでいただきました。今後も文学館では、現在活躍されている作家をご紹介していく企画展を計画したいと考えていますので、ぜひ、ご注目いただければと思います。（学芸課／野々村昭美）

館長室から

「青春の詩」と天野篤さんのこと

元吉　喜志男

「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方を言う…年を重ねただけで人は老いない。理想を失うときに初めて老いる。…」サムエル・ウルマンの「青春」という名のこの詩と初めてであった時の新鮮な記憶は今も残っています。

先日、あるラジオ番組で天野篤さんから、この「青春の詩」とお父さんにまつわる想い出話を聴き、改めて考えさせられました。

私自身も、この詩は〝情熱年齢〟維持や、お世話になった先輩が退職される時に感謝の気持ちに添えたり、高齢者の方々と交流の場面などで活用させていただいたりもしました。

天野篤さん。年間500件を超えるオペをこなし驚異的な成功率を誇る心臓外科医。平成24年2月、天皇陛下の冠動脈バイパス手術を、私立医大出身者としては異例の、東京大学医学部との「合同チーム」の一員として執刀し、話題になった医師と言えば、「ああ～、あの…」と思い起こすことでしょう。若い頃、心臓病の父親の手術に自らも執刀助手として立ち会いましたが、付け替えた心臓の人工弁を縫いつけた糸のほんのわずかな緩みから血液が逆流し、お父さんは帰らぬ人となりました。お父さんの死後、生前にお父さんが書き残していたこの詩と初めて出会ったといいます。国鉄（JR）に勤務していたお父さんが、こうした心で人生に向き合っていたことや一糸の重みを深く胸に刻んだことが、その後の天野医師の生き方に大きな影響を与えているようです。現在、「一途一心」・「明日のために今日の一日を大切に」を座右の言葉としてあげる天野さん。

心に響く命ある言葉。文学館もそうした言葉をより多くの人の心に届けられる役割を担える館として成長していければなどと考えたりしているこの頃です。

土佐文学さんぽ 61

浦戸湾今昔 ―「海辺の光景」安岡章太郎など―

猪野 睦

安岡章太郎が「海辺の光景」をかき、野間文芸賞になったのは一九六〇年だった。以降この作品は芥川賞作家の名品として多くの人に読まれてきた。高知市の浦戸湾沿いの病院に入れられた母が没するまでの九日間、父と病院で過ごす日々を、故郷山北の父の生家や東京での暮しの日々の回想なども混えてかいた作品だった。

浦戸湾といえば田中貢太郎などによって屋形船や帆傘船が行き交い、投網のまわし打ちや、桂浜や種崎への湾内めぐりの巡航船などとともに風光明媚な入江として誇らしげにかかれてきた。絵はがきなども一役買った。

だが安岡章太郎の「海辺の光景」にはそれがでてこない。母の死に向きあう日々ということもあって作品も重くなったのかと思いながら読んだ記憶があるが、もうこのときの浦戸湾はかつての浦戸湾ではなくなっていた。

「海辺の光景」にでてくる湾は黒ずんだ水がひたひたと濡らしている。暗い海面は重そうな水が膨れあがりながら生温たかな空気が、あたりをじっと浸している。岬に抱かれた童話風の島を浮かべたままの光景、潮が引くと幾百本もの杙が黒ぐろと突きたっている。どうみてもかつての浦戸湾ではなかった。その汚れた海が母の臨終にたちあっていく心情とともに、ながめる暗い海面の描出が作品を重厚なものにしていた。

高知市のパルプ工場のたれ流す排液は毎月一万四千トン、それが大川筋を腐臭を放つ茶色のドブ川にかえ、それが浦戸湾に拡散して流れこみドブ湾に変えていた。一九七一年、「浦戸湾を守る会」が業をにやしてパルプ会社の排水口に生コンを流しこんだ。この生コン事件で工場は閉鎖した。

「海辺の光景」にでてくる湾の黒ずんだ重い水は、このパルプ排液のひろがりだった。あからさまに公害とかきはしなかったが この湾の汚れは現実の描出でもあった。それが作品を重いものにした。

浦戸湾といえば土佐文雄の槇村浩小説「人間の骨」が映画化されたとき、木之下晃明監督が、この浦戸湾をロケに使った。病む槇村浩を見舞う恋人を設定した。晴れた初夏、パラソルをさし船頭の漕ぐ舟にゆられて浦戸湾をよぎって病院へむかう。広い輝く湾を使った見事な演出だった。こういう浦戸湾の使い方もあったのかと感じ入った。

（詩人）

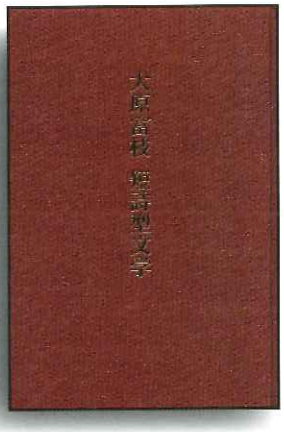
◀浦戸湾

資料受贈報告

―最近の寄贈資料から―

『大原富枝 短詩型文学』

山下伸男著刊
2013年1月 183頁 四六判



大原富枝（1912～2000）は、高知県長岡郡吉野村（現・本山町）出身の小説家。代表作『婉という女』をはじめ、一貫して女の生き方を描き続けた作家として知られています。

大原の著作には、『建礼門院右京大夫』、『わたしの和泉式部』、『忍びてゆかな 小説 津田治子』他、古今の歌人を描いた作品があります。また晩年には、「短歌」誌上に随筆「詩歌（うた）と出会う時」を連載。近現代の歌人・俳人20余名とその作品について叙述し、後に単行本にまとめています。著作の数々から、詩歌に造詣が深かったことが窺えます。

本書『大原富枝 短詩型文学』は、大原自作の短歌・俳句・詩を、それぞれ年代順に編んだ作品集。スクラップ帖や知人に贈った色紙、手帖や日記、覚え書きノートの走り書き、著書掲載作等、膨大な資料に目を通し、埋もれていた作品を丹念に拾い上げた労作で、若き日の療養時代以降の暮らしぶりや心情が伝わってきます。収録作には簡潔な解題が付され、写真資料も豊富。作品がつくられた当時の状況や小説との関連について知ることができ、折々の大原や初出資料を収めた写真が目を引きます。

本書には、詩人の中村 稔氏、俳人の宇多喜代子氏も寄稿。それぞれ大原の短歌と俳句を評し、その力量の非凡であったことを指摘しています。

著者・山下伸男さんは、元・本山町立大原富枝文学館館長で、大原富枝研究会会長。同会発行の「山査子（さんざし）」に「大原富枝の作品とその周辺」を連載するなど、地道な調査・研究を続けておられます。

（学芸課／小松路代）

受贈報告（平成25年4月～7月）敬称略

▼**山本一力**・「色紙「読んで。」山本一力書」▼**嶋岡 晨**・「（季刊詩集）ゆすりか96号 嶋岡 晨「握り飯」収載 藤森里美編 ゆすりか社刊」▼**大原富枝研究会**・「大原富枝 短詩型文学 山下伸男著刊」▼**市原麟一郎**・「土佐の民話 合本 487号～500号・（別冊）笑いの玉手箱 市原麟一郎編 土佐民話の会刊」▼**藤本知子**・「史跡ガイド 土佐の自由民権 公文 豪著 高知新聞社刊」▼**渋谷雅之**・「近世土佐の群像（6）樋口真吉日記（上）渋谷雅之著刊」他 ▼**竹本義明**・「夏目漱石遺墨集 夏目漱石著 津田青楓 夏目純一監修 求龍堂刊」他 ▼**知野文哉**・「坂本龍馬」の誕生―船中八策と坂崎紫瀾 知野文哉著 人文書院刊」▼**多賀一造**・「母なる大河 四万十川に生きる 多賀一造著 馬酔木舎刊」▼**林 嗣夫**・「（詩集）林嗣夫詩選集 林 嗣夫著 ふたば工房刊」他 ▼**竹村豊繁**・「父のビルマ戦記 竹村正幸著 馬酔木舎刊」▼**高知県立図書館**・「人間教師 生活綴方の父・小砂丘忠義 竹内 功著 高知新聞社刊」他 ▼**大川村教育委員会**・「（紙芝居）えんこうとキュウリ 話者：近藤清子 脚本・絵：筒井琴美」他

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

トピックス

◆変わる常設展示！ 田中英光 生誕100年を顕彰

高知県立文学館では、いつ来ても新しい発見、新たな感動に出会っていただけるような常設展示をコンセプトとして、ローテーション方式で展示の入れ替えを行っています。

今年度の第一弾、詩歌コーナー・「槇村浩→島崎曙海」に続き、第二弾として、現代の作家コーナーを小山いと子から今年生誕100年を迎えた田中英光の展示に入れ替えました。

▲展示の様子

田中英光は1913(大正2)年生まれ。両親が高知県出身で、父・岩崎鏡川(英重)は維新史研究家としても知られています。少年時代を鎌倉で過ごし、敬愛する兄・英恭の影響で、三木露風や北原白秋などに親しみました。

英光は早稲田大学1年生の時、第10回オリンピック・ロサンゼルス大会に漕艇選手として出場した経験を持つ異色の作家で、その体験をもとにした『オリムポスの果実』は、優れた青春文学の一つとして知られています。また、太宰治に師事し、その影響を強く受けました。『オリムポスの果実』の命名は、太宰治によるものです。

戦後、共産党に入党し、沼津地区委員長として労働運動に献身するも、地区活動の行き詰まりと党員の腐敗に幻滅し地区委員長を辞任します。入党後約1年で脱党、その党生活に取材した「N機関区」『地下室から』などを発表しました。晩年は無頼派作家と称され、退廃の日々の中にも「野狐」『酔いどれ船』など、優れた作品を多く残しました。

今回の展示では、生誕100年を記念して、貴重な初版本や初出雑誌、書簡などを中心にその激動の生涯と作品を紹介しています。

また展示の一部「英光と土佐」のコーナーは、平成25年度博物館実習生の皆さんが企画・展示しました。

(学芸課／岡本美和)

▲英光の遺書(複製)と遺作集『さようなら』など

イベント紹介

平成25年度第16回児童生徒文学作品朗読コンクール県審査のお知らせ

高知県立文学館では、「第16回児童生徒文学作品朗読コンクール県審査」を平成25年11月10日(金)13時より、文学館1階ホールにて行います。全国的には珍しい全県区を対象とした小中学生対象の朗読のコンクールです。本年度より特別賞に「高知県教育長賞」を新設しました。特別審査員には絵本『へんなかお』で全国的に有名な絵本作家・大森裕子先生をお迎えし、特別賞審査と絵本をつくることについての記念講演会、サイン会も実施いたします。

今年度は、言語活動から児童・生徒の読解力、表現力を育成し、豊かな心や感性を伸ばすことを目的とした高知県教育委員会「ことばの力育成プロジェクト推進事業」との連携もあり、高知県下36校108人が参加予定です。8月には、西部、東部、高知の3地区で審査が行われ、11月の県審査代表を選出します。

例年、地区審査は夏休み中に開催しておりますが、どの学校も、子どもさんとご担当の先生が二人三脚で熱心に練習を重ね、出場して下さいます。朗読をすることで、「読む」という個人的な体験が、「思い描く」、「伝える」という様々な体験へと広がります。「ことばの力」を育むことは、知識や技術を伸ばし、心で感じたり、感覚をイメージしたりするなど、「心を育てる」ことへと繋がっていくと思われます。高知県立文学館は、そういった子どもたちの瑞々しい感性を育む場として、お役に立っていきたいと考えております。

昨年も出場して下さった学校の先生から、「今年も出場したいと言う生徒がいます」とお聞きするたびに、子どもさんにとっても大事な舞台であるということが伝わってきます。

11月の県審査では、高知の子どもが伸びやかな感性を使って朗読をしている姿を、ぜひ文学館で御覧ください。

(学芸課／谷岡真衣)

◆県審査開始日時：平成25年11月10日(日) 13時～
◆場所：文学館1階ホール
◆入場無料

Happiness is SNOOPY™

スヌーピーの小さな幸せ探し展

8月1日(木)から 9月16日(月・祝)まで 好評開催中!!

■あなたは、どんなときにしあわせを感じますか?

高知県立文学館では、毎年、夏休み期間に親子で楽しめる展覧会を開催しています。

今年は絵本の世界を体感できる展覧会【Happiness is SNOOPY™ スヌーピーの小さな幸せ探し展】を開催し、多くのお客様から好評をいただいています。

この展覧会は、スヌーピーの生みの親であるチャールズ・モンロー・シュルツ(1922−2000)さんが1962(昭和32)年に発刊した絵本『HAPPINESS IS A WARM PUPPY』(しあわせはあったかい子犬)がモチーフとなっています。

「ピーナッツ」の登場人物が日常で感じる幸せを紹介しているカラフルなこの絵本は、シュルツさんとごく親しい人たちとの語らいから生まれました。

▲シュルツさんは『HAPPINESS IS A WARM PUPPY』の他に、様々なテーマで絵本を描いています。

語らいの中で、「あなたにとっての幸せはなに?」と聞かれたシュルツさんは「幸せはあったかい子犬」と答えます。ここからヒントを得て、シュルツさんは「Happiness is」のフレーズではじまるコミックを描きました。さらに、このフレーズとイラストレーションを合わせた絵本が誕生します。

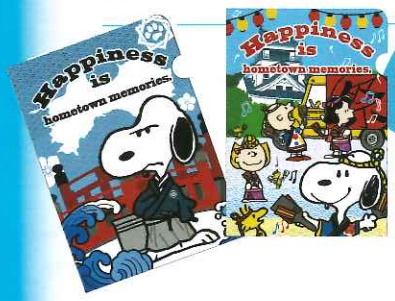
この小さな絵本は大きな力を持ち、誕生から50年を経た現在も、〝私たちの日常には普遍的でささやかな幸せがたくさん散りばめられている〟ということを教えてくれています。

実際、ささやかな幸せを大切にしていたシュルツさんは、1日の仕事を終えた後、もっとも大切なことは家に帰って子犬をかわいがってやることだと信じ、例えどんなに有名であろうともその暮らしぶりを変えませんでした。

展覧会場では、そんな絵本の世界を五感で味わっていただけるよう、アートと遊びを取り入れ、心あたたまる楽しい空間を作りました。また、当館独自の視点からシュルツさんと文学の関係を詳しくご紹介するコーナーや、「ピーナッツ」シリーズの名翻訳者・谷川俊太郎さんを紹介するコーナーも設けています。

9月16日(月・祝)まで開催しておりますので、ぜひお越しください。楽しい関連イベントや当館限定の可愛いスヌーピーグッズなどを用意して、お待ちしております。

(学芸課/福冨陽子)



高知会場限定
クリアファイル2枚組
(630円)も大好評販売中です!

▼壁に描かれたスヌーピーの足跡を押すと音がなって演奏できるなど、会場は、五感で楽しめる工夫がいっぱいです。

PEANUTS™ by Schulz © 2013 Peanuts Worldwide LLC

高知県立文学館ニュース 第62号 平成25年9月5日発行 〒780-0850 高知市丸ノ内1丁目1番20号 電話088-822-0231 FAX088-871-7857

高知県立文学館 カレンダー 9月～12月

企画展案内

Happiness is SNOOPY™
スヌーピーの小さな幸せ探し展

8月1日(木)～9月16日(月・祝)　場所：企画展示室　観覧料：500円(常設展含)

本展は、チャールズ・M・シュルツさんの「Happiness is a warm puppy」を五感で味わっていただけるようにつくりあげたものです。スヌーピーとその仲間たちが繰り広げるカラフルな絵本の森で小さな幸せをたくさん見つけてください。

PEANUTS™ by Schulz
© 2013 Peanuts Worldwide LLC

展覧会の紹介をしています！ 詳細は７ページをご覧ください。

鹿持雅澄著「土佐日記地理辯」旅程図より／安政4年(1857)

紀貫之と『土佐日記』展

9月28日(土)～11月24日(日)　場所：企画展示室　観覧料：400円(常設展含)

我が国最初の日記文学として知られる紀貫之の『土佐日記』は、貫之が土佐守の任を終えて京に帰る55日間の旅を綴ったものです。展覧会では、紀貫之と彼の残した『土佐日記』の世界を当館所蔵の資料を中心に紹介し、郷土の古典文学に親しんでいただきます。

展覧会の紹介をしています！ 詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。

近代文学のあけぼの展

12月7日(土)～平成26年1月31日(金)　場所：企画展示室　観覧料：400円(常設展含)

高知県出身の自由民権の志士たち、坂崎紫瀾、植木枝盛、宮崎夢柳らは、外国文学の翻訳や口語詩の試みを行い、日本の近代文学に大きな影響を及ぼしました。
三人を中心に、近代文学のあけぼのと高知の人々との関わりをご紹介します。

(※12月27日～1月1日は年末年始のため休館となります。)

©JET

第16回 児童生徒文学作品朗読コンクール

当館では、朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいと願い、毎年、朗読コンクールを開催しています。子どもたちが一生懸命練習した朗読を聞きに、ぜひ、会場へお越しください。

◆県審査(公開) 表彰式・記念講演会があります。

会場：高知県立文学館ホール
日時：11月10日(日) 午後1時～

地区審査で選出された児童生徒の公開審査および表彰式・記念講演会を開催します。

記念講演会開催

サイン会も開催します。

講師 「よこしまくん」シリーズ、第4回MOE絵本屋さん大賞第4位「へんなかお」の作者、
大森 裕子先生

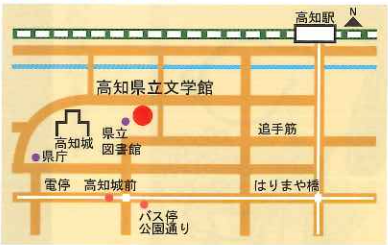
白泉社「へんなかお」　偕成社「よこしまくん」

利用案内

開館時間	午前９時～午後５時（入館は、午後４時半まで）
休館日	年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。 ※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料	一般350円　企画展はそれぞれ異なります。 20人以上の団体は２割引。高校生以下無料、 高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者１名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス〈県庁前行〉「公園通り」下車　北へ徒歩５分
- JR高知駅下車徒歩20分(またはバス・路面電車を利用)
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩５分
- バス停公園通り下車北へ徒歩５分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内１丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857